



優秀賞

「夢と感動」

愛知県立半田工業高等学校 建築科 3年  
松本 琉愛

建築業界は人に夢と感動を与えると私は信じています。それは、私が建設業界に夢と感動を与えてもらった人の一人だからです。

私は幼いころから、自分の世界を作ることが大好きでした。それは自分自身の手で考え出し、新しい世界をつくるのではなく、既存の空間、場所を私の世界としてストーリーを考え出したり、私だけの秘密基地にしたりすることでした。例えば、何気なく通った道の路地裏の先に見える場所に思いをはせたり、図書館の大きな階段に魔法を結びつけたりすることで私の世界をつくっていました。ひっそりと自分の世界に浸ることはとても楽しく、高揚感があり、今でもたくさんの思い出の場所として強く記憶に残っています。

この行動は成長するにつれて現実的に、より身近なものになっていきました。魔法をかけるのではなく、魔法がかかっているかのような空間を見つける、実際に少し遠回りをして路地裏の先へ抜けてみるなどして、私は自身の世界を創造するだけでなく触れることによって世界を広げていきました。そして、その世界を自分でつくりたい。私のつくった場所、空間が誰かの世界になってほしい。そう思うようになっていったのです。

中学を卒業した後、私は工業高校に進学しました。工業高校に通い、その空間を自ら創造するために多くのことを学んでいます。それらは気候風土と建築物の関係であったり、人の生活の流れや、著名な建築家が設計した建造物であったりして、私は大いに感動し、何度も夢を描きました。今まで苦手だった勉強を楽しく感じられるようになり、本当に私のやりたいことなのだと実感しました。

しかし、この私が創造したいと思っている世界と建設業がとても密接な関係であるということに気がついたのはごく最近のことです。それまで私は建設業の力だけではなく、ほかの要因もあるものだと考えていました。その考えを改めるきっかけとなったのは高校三年生の夏休みに建築競技設計、コンペに

出す作品を練っているときの「置くだけじゃ意味がない。」という担当の先生の一言でした。この言葉は私を大きく震わせました。そのとき私が設計していた家は、ある一つのものに執着しており、ほかの空間が無造作に置かれたような家でした。置くだけではその空間に最低限の意味しか与えません。その空間を世界に、物語を、人を移すためには建築の三大要素「強・用・美」が必要でした。

このことに気がついてからは大変でした。この建築の三大要素のことは事前に授業で習っていたため存在は知っていましたが、いざ設計する際に考えながら設計しようとしても上手くいきません。空間の兼ね合いを考えて設計したつもりでも、どこか一つが霞んでしまう。すべての空間に世界を与えることはとても難しいことでした。また、その世界を人に伝えることも難しく、私の中だけで完結してしまう設計も多くあり、私が今まで浸ってきた世界を創造することはとても難しいことだったのだと思い知らされました。私には圧倒的に経験と知識が足りませんでした。

私は今、進学を希望しています。それはもっとたくさん建築について学びたい、という気持ちがあるからです。その思いは夏休みのコンペの取り組みを通じてより強く明確なものになりました。

現在、たくさんの建造物が町を成しています。それは利便性に特化したものや、値段に配慮したものなど、様々なものです。しかし、すべての建造物に共通していることは無駄な空間が少ないことです。それはその空間で過ごす人の居場所をつくる、意味のある場所です。そのような空間は人の記憶に残り、夢と感動をつないでくれます。

私は建築を学ぶ学生として、夢と希望を与えられた者として、そこに生活する人に夢と感動を渡す立場になりたいと思っています。なんの変哲もないと思っていた道が、家が、階段が、誰かの新しい世界へとつながる空間を創造し、また誰かが私と同じような夢を抱くことを願って、今日もまた少し夢に近づきます。